

今年もあります 大相撲観戦雑記  
(平成 25 年初場所を終わってひとこと)

### <1> 予想外の展開

三日目、白鵬が妙義龍に敗れる番狂わせ。妙義龍が基本を押さえた正統派・技巧派の力士である上に、さらに力を付けて来ていると感じさせる一番だった。しかも、これがすべての予想外の展開の引き金になった。前半はやや心もとない相撲も見えた日馬富士が、見る見る内に燃え上がって来てしまった。矢が突き刺さるような鋭い立ち合いと敏捷な動きは日に日に磨きがかかり、(日馬富士には申訳ないが) 予想に反して全勝優勝を果たしてしまった。しかも予想外の出来事のおまけに、この場所を面白くしてくれた立役者の妙義龍は千秋楽に負け越しとなり、殊勲賞のない場所となってしまった。日馬富士の三度目の全勝優勝をどう評価して良いかはわからない。これまでの成績を見る限り、もう少し様子を見ないと本質がわからないのが日馬富士である。ここ数場所の動向をじっくり見守りたい。もしかしたら・・・かもしれないので。

### <2> どうしようもない結末

把瑠都が関脇に陥落して五大関から四大関になったが、四人の成績を合算しても「平均 9 勝 6 敗」という状態。ようやく 10 勝できた二人と、ようやく勝ち越してきた二人ではコメントのしようもない。稀勢の里の相撲は相変わらず腰高と脇の甘さが目立つ。仕切りの間の腰の位置はかなり下りてはきたが、立ち合いの直後にもう棒立ちになっていることが多い。しかも、仮に上手を取ることができても、取る位置が深すぎるので相手の出方ひとつに左右される結果となる。脇をしめて「おっつけ」と「前まわし」に拘るような相撲に変えれば、腰も下りて安定度が増すと思うが。琴奨菊は、自分の得意の形になることができなければ何もできない。立ち合いの鋭い踏み込みがすべてを決していることが多い。相撲協会の幹部は、大関に奮起を促すようなメッセージを発しているだけで「選んだ責任」を感じているのだろうか。「安易な昇進」と、甘い降格規定によって「優遇された地位」がこの結果を招いている。この上さらに「次の大関候補」などという騒ぎにも同調しているが、強烈なリストラクチャリングを断行して、「強い横綱を生み出すための大関」や「場所を面白くできる名大関」を意識した改革が喫緊の課題ではないかと思う。

### <3> 関脇・小結は予想通りの結果か

「豪栄道は 10 勝以上すれば大関昇進の足がかりを確保」という騒動が先行していた。マスコミ・それに同調する相撲協会・解説者などの間で騒ぎすぎている感じがした。前半五日間は成長を感じさせる相撲内容があったが、横綱・大関戦が続く中盤に失速し、後半はスタミナ切れで無様な負け方が目立った。その結果千秋楽の対栃乃心戦で苦戦の結果ようやく勝ち越しと言う結果になった。まだまだ修行が足りない状態なのに、周りが騒ぎすぎのではないだろうか？把瑠都は大関から陥落した場所で、「10 勝を上げれば復帰できる」という特権の場所。最初の三日間の土俵を見る限り、10 勝上げられるような相撲には見えなかった。10 勝はおろか勝ち越しすら無理ではないかというのが私の印象だった。にも関わらず 8 勝 7 敗という成績は意外な出来栄えと見る。栃煌山の相撲は、稀勢の里同様あまり進歩も工夫もない。もろ差しになれば素晴らしい結果になるが、そうでない場合は無様な負け方が多い。どうして大関候補なのか、私には理解できない。新小結松鳳山は見事に跳ね返された。松鳳山らしい相撲はいくつかしか見られなかったが、何場所後かにこの体験が成果となって現れるかもしれない。けれん味のない生真面目な相撲スタイルは好感を抱かせるので、今後に期待したい。

#### <4> 平幕の活躍力士達

白鵬を破った西前頭筆頭の妙義龍は、今場所はそこそこの成績を上げて三役にカンバックするのではないかと予想したが、前述のように千秋楽に負け越しという結果に終わった。

三大関を破り（今や大関を破ってもさしたる価値はないのかもしれないが）、しかも自分より下位の者に負けたのは対豊ノ島戦だけという安美錦の成績は9勝6敗。上位戦が終わった後の後半戦を6連勝というのは見事だ。中味の乏しい大関候補の相撲よりも遥かに見ごたえがあるし、インタビューに答える受け答えにも味がある。対戦相手を十分に研究した上で自分の作戦を立て、臨機応変の対応ぶりと終わった後の冷静な分析が面白い。相撲史上に残る名力士に数えられる相撲取りである。筆頭で9勝6敗は三役復帰が予想されるが、それ以上に来場所の活躍が楽しみである。

毎場所少しづつではあるが進歩を見せているのが勢。8勝7敗とさほど目立たない成績ではあるが、速さ・鋭さ・粘り強さなど確実に成長がうかがえた。

初日の碧山戦、5日目の千代大龍戦を見た感じではまだまだかなと思わせたが、6日目以後を9勝1敗で治めた高安。長いトンネルに入っていたが、「高安らしさ」が復活した場所だった。鳴戸部屋独特の立ちしぶりが時々見られるが、相撲内容としては兄弟子の稀勢の里よりも面白い。この力士は腰高を改善して前みつを取る相撲を覚えたら鬼に金棒だろう。

力強いかちあげやぶちかましで相手をのけぞらせておいて、そのまま一気に突き出し・押し出しを決める千代大龍の前進相撲が前半の取り組みの中で光っていた。これは悪い癖が抜けて良い方向に向かい始めたかと思わせたが、途中から叩きが目立つようになって来た。強い突き押しがあればこそ叩き込みが聞くのだとは思いますが、ここは前進突破型の相撲に拘ってもらいたいと思う。上位を目指すつもりがあるのならの進言である。

#### <5> 新入幕と再入幕

新入幕の琴勇輝の相撲は活気があって気持ち良かった。6勝9敗と跳ね返されたが、いくつかの課題が素人目にも見えていた。立ち合いの当たりは強く、鋭い突き押しが展開されるが、相手が後退するまでは自分から前進はしない。2本の足を揃えて定位置でつかい棒のような形で手を出すので、相手に叩かれやすい。腰から下の構えを確保した上での前進しながらの突き押しを身に付ければ今後の成長が期待できるかもしれない。

栃乃若が十両陥落から復帰して衆目の期待を集めたが、辛うじて勝ち越しした程度に終わった。とにかく前へ出ながら自分の形に持っていこうとして、自分の形になることができなくても前へ出る圧力だけで相手を土俵外に運べる「下がらない相撲」は面白い。しかし、棒立ちの状態から差し手をこじ入れるような相撲の取り方には限界がある。立派な体格を活かして、大鵬のような腰で相撲を取る力士になると面白いと思うが。

#### <6> 時代の節目が近づいたか

十両の高見盛の引退だけが大きく取り上げられてしまったが、この場所はベテラン力士達が時代の節目に差し掛かっているのを感じた場所でもあった。元大関の雅山は幕尻で3勝12敗、腰の構えがふらついているような状態で、15日間勤め上げるのは難しそうな状況に見えた。「負け越して十両陥落となったがまだ現役を続ける」と宣言していたので、来場所以降の動向に注目したい。

若の里も11枚目で4勝11敗なので幕内残留は厳しそうな感じがする。「さすが若の里」と思わせるような相撲もありはしたが、攻め込まれると粘り腰がないような一方的な負け方が目立った。

いずれも来場所はどんな感じになるだろうか。

以上